

非自立性

俳句は一行の詩として自立するか。

まだ俳句を始めたばかりの頃、同人誌の仲間とそんな議論をしたことがある。直接の相手はたしか藤原龍一郎だったと思う。現在では歌人として知られているが、当時は赤尾兜子の門下で藤原月彦と名乗り、《致死量の月光兄の蒼全裸》や《童貞や銀器に注ぐ秋の水》といった華麗な俳句で注目されていた。その藤原は当然のように「自立する」と主張し、それにたいしてわたしは「自立しない」と反論したのである。もうかれこれ二十年以上も前のことだ。

なぜそんな昔のことを覚えているかというと、この問題は以後もわたしのなかで何度となく自問され、俳句の本質を考える上で大きな課題になっていくからだ。もちろん、俳句が一句として独立した作品であるのはいうまでもない。けれども、たとえば現代詩の作品と同じような構成を、俳句の一行が持ち合わせているとは思えない。かつて新興俳句が連作という形式を模索したのは、ひとことでいえば俳句における構成の欠如が気になったのである。

いま現代詩を引き合いに出したが、二十年前の議論もやはり現代詩を意識したものであったように記憶している。思うに藤原は、俳句の一行はまさに一篇の現代詩に匹敵するのだという、俳人

としての自負を語ったのである。事実そうした自負に足りる作品（処女句集『王権神授説』に代表される）を持っていた。そして当時から天邪鬼だったわたしは、その自負にいわば水を差したわけだ。

具体的な話の内容はもう覚えていないし、相手の藤原にしても、まるで古い証文を持ち出されたようで当惑するだろうから、思い出話はこれで終わる。ただしこの問題についてのわたしの関心は、先にも述べたようにまだずっと持続しているので、この機会にあらためて考えてみる。

くれぐれも誤解しないでほしいが、わたしが俳句は自立しないというのは、だから俳句が現代詩よりも価値が低いという意味ではない。自立しないことそれ自体が俳句の価値だといいたいのである。

そもそも「句」とは、英語でいえばフレーズであり、つまり文や詩の一部のことだ。以前に高橋睦郎氏と対談したとき（『希望としての俳句』）、「句というのは、要するに歌の一部ですよ」「だから、もともと完成していない」と水を向けたら、次のような答えが返ってきた。

そうですね。完全性を希求する不完全性であるということ。しばしばそれが完全性であると思いつくっているものよりも、その希求の力によって、さらに大きなものを含み込んでいるということですね。

（高橋睦郎『百人・句』所収）

なるほど、うまいことをいう。他人の禪で相撲をとるようで気が引けるが、まさに「完全性を

希求する不完全性」によって、自立しないことが俳句の価値なのだと説明させてもらう。さらに掩護射撃を求めて、常連の『日本国語大辞典』を引くと、「句」についてこう書いてある。

①文章の中のことばのひと区切り。また、ことばのひとつづき。②詩歌の構成単位。④漢詩で、四字、五字または七字などをつづけたひとまとまり。⑤和歌で、韻律上、五音節、七音節などで区切られたもの。

それぞれの用例は省いて二番目の意味まで引いた。ここで②の④の意味が、ズバリ俳句という「句」の出自にはかならない。もう説明するまでもないと思うが、俳句の定型である五七五は、もともと五七五七七という和歌の上の句であり、それが五七五の発句と七七の脇句に分かれたところから俳句の歴史は始まった。

今日わたしたちが俳句と呼んでいるものは、もちろん発句ではない。けれども脇句があらうとなかろうと、五七五という定型は、それがかつて和歌の上の句だったという以外に、どこにもその根拠をもたない。その意味において、発句の本質はそのまま今日の俳句に引き継がれている。そう考えてかまわないはずだ。

ならば発句の本質とはなにか。かつて山本健吉は「挨拶と滑稽」のなかで、「一、俳句は滑稽なり。二、俳句は挨拶なり。三、俳句は即興なり」といつてみせた。あまりにも有名な言葉だが、これはそのまま「俳句」を「発句」に読み替えることができる。つまり山本はここで、今日の俳

句は俳諧の発句と同じだと主張しているのである。

わたしは以前、「山本健吉論」(『詩的ナショナリズム』所収)という文章に、この「三つの命題」は桑原武夫の第二芸術論にたいするアンチテーゼであり、近代主義者に向けた「古典主義者の『悪意』」だと書いた。これも二十年近く前のことだが、わたしの考えは当時からあまり進歩していないので、ついでにその文章を一部引用しておく。

そしてここで山本のほうが(引用者注・桑原武夫よりも)あきらかに本質的な批評であるのは、わが国の伝統的な詩意識を「近代芸術」の価値観の外側で論じていることであり、かつ俳句の問題は本質的に古典詩の問題であること、つまり「近代芸術」の外側で論じられるべきであることを明確に打ち出しているからである。

今回の話題に引きつけていえば、俳句が自立するかどうかという発想自体が「近代芸術」の価値観なのだ。俳句にかぎらずわが国の古典詩が短いのは、もともと掛け合いの性質を持っているからで、だから詩歌の一部である「句」も作品になる。と同時に、詩歌の一部ならその前後に文脈がある。かりに文脈といったが、俳諧がいわゆる座の文芸なら、座にも文脈があっている。「滑稽」と「即興」はいま措くとして、「挨拶」にはその前の文脈が必要になる。

発句は文字通り座にたいする挨拶であるが、座における文脈とはさしずめ、挨拶のシチュエーションということになる。それは客人(発句の詠み手)と主人との関係であったり、その土地の

風物であったり、そのときの季節であったりする。とりわけ季節が重要なのはいうまでもなく、発句に当季を詠み込むことは挨拶の作法であった。今日わたしたちが手紙に書く時候の挨拶と同じである。

こうしたシチュエーションは、その場にいる連衆たちの共通認識であり、発句はそのシチュエーションをふまえて理解される。前の章で、今日の句会はずのアナロジーとして成立すると書いたが、とりわけ吟行の句会では、参加者が体験した風景が重要なシチュエーションになり、句の理解もその場の共通認識が大きく作用する。

だから句会では点数を稼いだのに、句会の場を離れると通用しないという句がある。また一方で、句会の外側でもじゅうぶん通用する句もある。作品の自立性という視点でみれば、後者のほうが前者よりも価値が高そうだが、しかし句会の外側で通用するかどうかは、俳句の価値とまったく関係がない。芭蕉も、「文台引きおろせば、すなはち反古なり」といっているのではないか。

むしろ逆に、掛け合いの歴史から生まれた五七五の定型では、あるシチュエーションにたいする言葉のウィットが価値を持つ。このことを否定したら、俳句のおもしろさは半減するはずで、シチュエーションがその句に奥行きを与える場合はけっして少なくない。だからもし読者にシチュエーションを共有してほしいと思えば、それを説明する前書をつけなければならないのである。

今日の俳句では、前書があまり好まれないようだ。思うにそれは、俳句の自立性を強調したいという作者の意志によるのだろう。けれどもわたしにいわせれば、前書はもっと積極的なレトリックとして認識されるべきだ。前書の効果を考えるために、次のような作品を読んでみる。

梅雨の最中、西行の研究家にして俳句雑誌『花守』主宰、目崎徳衛先生逝去の知らせ至る
ずぶぬれの大葉桜があるばかり
長谷川 權

この作者は、前書にたいしてかなり意識的であり、句集にも前書のある句が多い。一句のきっかけは目崎徳衛氏の逝去であり、その訃報を聞いたとき、雨に濡れる葉桜の風景が作者の目に印象的に焼き付けられたのだろう。そして作者は、そうした文脈を読者に共通認識として与えたいと思った。さもないと、なぜほかのものでなく「大葉桜」なのか、なぜそれは「ずぶぬれ」なのかというモチーフが伝わらないからだ。

主題の「大葉桜」は、故人が「西行の研究家」であったことを象徴するものだ。この前書から読者は、「ねがはくは花のしたにて春死なむそのきさらぎの望月のころ」という西行の歌を思い浮かべることができる。そして西行はその願い通り、旧暦の二月十六日（新暦でいえば三月三十日）という花の盛りに他界したが、「目崎徳衛先生」の逝った日には、もう花は散ってしまっただけである。その葉桜を「大葉桜」と詠む心には、いうまでもなく故人の面影が重ねられている。いくら梅雨とはいっても、それが「ずぶぬれ」なのは作者の涙のせいだ。また「あるばかり」という下五には、大切な人を失った作者の心の空虚さが表現されている。前書がなければ、「大葉桜」は大きな葉桜の像を喚起させる以外は、季語として季節感を表すだけになる。そうすると「ずぶぬれ」は像として成り立つが、「あるばかり」という言葉への思い入れは伝わらなくなるだろう。

先のところで、発句に季を詠み込むのは挨拶の作法だと書いたが、今日の季語がその名残であるのはいうまでもない。つまり季語もまた、本来は当季というシチュエーションを背負っている。しかし今日の俳句が前書を嫌って、シチュエーションを作品に持ち込まないことで、作品のモチーフがすべて季語に集中してしまう。そこから俳句は季節詩だという考え方が出てきて、季節感ばかりが重視されるようになった。それは俳句という詩型が本来もっている豊かさを失うことではないのか。

もっといえば、俳句はその非自立性によって、まったく他の文脈に移すことも可能だ。先に「文台引きおろせば、すなはち反古なり」という芭蕉の言葉を引いたが、なにもこれを真に受けて句を捨てる必要はない。芭蕉自身が「文台」を引きおろしたあとに、その発句を散文のなかに移して「奥の細道」を書いた。高橋睦郎のいう「完全性を希求する不完全性」がそこで生きてくるわけだが、このことを述べるには、もうひとつ章が必要になる。

汎用性

前章のおわりに「奥の細道」のことを書いた。「文台引きおろせば、すなはち反古なり」といってみせた芭蕉にしてみれば、いちど「反古」にしたものを別の文脈のなかで再生したわけで、すなわち発句のリサイクルということになる。ただし前章で述べたように、五七五の定型にはもとも非自立性があるから、いったん解体したりせずそのまま別の用途に使える。だからリサイクルというより、汎用性があるといったほうがいい。

ちなみに「奥の細道」は長いあいだノンフィクションの紀行文として扱われてきたが、曾良の「随行日記」が発見されることによって、そこにいろいろとフィクションが入り込んでいるのがあきらかになった。そのフィクション性を国文学者たちがどう論じているか知らないが、「奥の細道」は連句として読めばいいのだという安東次男の解釈があって（『日本の旅人6 芭蕉 奥の細道』淡交社）、これはなかなか卓見とおもう。

たとえば「奥の細道」の冒頭近くに、

…住る方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、